

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第170集

細野Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

細野II遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7600箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実は重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の大船渡市細野II遺跡は、立根川右岸の谷底平野に立地し、平成2年度の発掘調査によって縄文時代・弥生時代の遺物や近世の墓壇が発見されました。ひき続き出土資料の整理をすすめ、ここに報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所、大船渡市教育委員会をはじめ関係各位に衷心より謝意を表します。

平成3年11月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 工 藤 巖

例 言

1. 本報告書は、岩手県大船渡市立根町細野7-4・5ほかに所在する細野Ⅱ遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、三陸縦貫自動車道の建設に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号はNF29-1216、調査略号はHNⅡ-90である。
4. 発掘調査は平成2年4月12日から6月8日まで行った。調査面積は5000㎡である。
5. 発掘調査は佐瀬 隆、濱田 宏が担当した。
6. 報告書の作成は佐瀬 隆が担当した。
7. テフラの分析はバリノサーヴェイ株式会社に依頼した。
8. 調査に際しては大船渡市教育委員会のご協力をいただいた。
9. 調査に関わる諸記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保存している。

目 次

序

例言

〈本 文〉

I. 調査に至る経過	2
II. 遺跡の位置と立地	3
III. 調査の方法と整理	6
IV. 遺構と遺物	8
1. 遺構	8
2. 遺物	12
V. まとめ	27
付編 細野II遺跡火山灰分析報告	28

〈 図 〉

図1 遺跡の位置	1	図14 出土遺物 (1)	17
図2 遺跡付近の地形区分図	3	図15 出土遺物 (2)	18
図3a 表層地質断面図 (H1・2区)	4・5	図16 出土遺物 (3)	19
図3b 表層地質断面図 (D2区)	4	図17 出土遺物 (4)	20
図4 表層地質模式柱状図	5	図18 出土遺物 (5)	21
図5 遺構配置図	7	図19 出土遺物 (6)	22
図6 C2o焼土遺構	9	図20 出土遺物 (7)	23
図7 D2m焼土遺構	9	図21 出土遺物 (8)	24
図8 F1y焼土遺構	9	図22 出土遺物 (9)	25
図9 F2d焼土遺構	9	図23 出土遺物 (10)	26
図10 I2a焼土遺構	9		
図11 I2f焼土遺構	9		
図12 I2i墓壇出土遺物	10		
図13 F2i墓壇	11		

〈圖 版〉

圖版 1 表層地質·····35	圖版 8 出土遺物 (5) ·····42
圖版 2 燒土遺構·····36	圖版 9 出土遺物 (6) ·····43
圖版 3 墓塚·····37	圖版10 出土遺物 (7) ·····44
圖版 4 出土遺物 (1) ·····38	圖版11 出土遺物 (8) ·····45
圖版 5 出土遺物 (2) ·····39	圖版12 出土遺物 (9) ·····46
圖版 6 出土遺物 (3) ·····40	圖版13 墓塚出土遺物·····47
圖版 7 出土遺物 (4) ·····41	

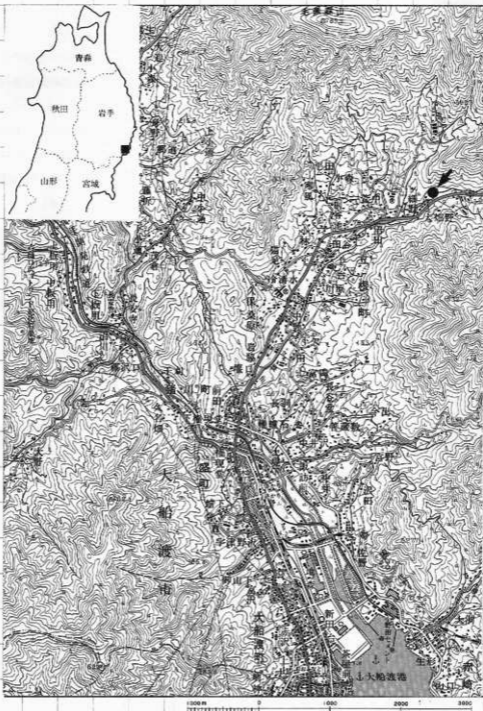


図1 遺跡の位置 (国土地理院(1981)『盛』の一部使用)

I. 調査に至る経過

三陸縦貫自動車道は、仙台市と宮古市を結ぶ延長約220kmの一般国道の自動車専用道路であり、八戸・久慈自動車道とともに昭和62年6月指定された。全国約14000kmの高規格幹線道路網の一部をなすものである。

大船渡・三陸道路は、大船渡市大船渡町下船渡～気仙郡三陸町越喜来の間約17100mの事業であり、交通隘路区間の解消を目的に進めてきた事業である。また、山田道路は下閉井郡山田町船越～関谷の間約7800mの事業であり、現道の増大する交通需要に対応するため、一部を昭和62年度に事業化したものである。いずれも、三陸縦貫自動車道の一部として路線指定されたことにより、高規格幹線道路として工事の促進が図られている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和63年度に分布調査と試掘調査を行い、平成元年9月5日付け「教文第415号」で事業について照会し、9月25日付け「建東陸調第111号」の回答をうけて三陸国道工事事務所と協議を行い、発掘調査を岩手県文化振興事業団の受託事業として調整実施することとした。

これを受けて当埋蔵文化財センターは、平成2年度に大船渡道路関連の沢川遺跡、猪川館跡、細野Ⅱ遺跡、山田道路関連の湾台Ⅲ遺跡、細浦Ⅰ遺跡、細浦Ⅱ遺跡の調査を下記の契約により実施したものである。

遺跡名	契約年月日	調査期間	調査面積
沢山遺跡	平成2年6月5日	7月3日～8月3日	1000㎡
猪川館跡	2年4月4日	4月11日～11月14日	7500㎡
細野Ⅱ遺跡	2年4月4日	4月12日～6月8日	5000㎡
湾台Ⅲ遺跡	2年7月31日	8月20日～10月8日	2000㎡
細浦Ⅰ遺跡	2年4月19日	5月1日～6月28日	3600㎡
細浦Ⅱ遺跡	2年4月4日	4月11日～4月28日	1000㎡

II. 遺跡の位置と立地

細野II遺跡は、北緯39°71′、東経141°44′付近の東日本旅客鉄道大船渡線盛駅から北北東へ約4.5kmの距離にあり、北方を毛無森山(786m)、南方を今出山(756m)にはさまれて西流する立根川右岸の谷底平野に立地する(図1)。当谷底平野は遺跡付近で標高110~130m、約80mの幅を有し、2m程の比高で河床面と接している。遺跡付近の地質基盤は、中生界、古生界の堆積岩類とこれらに貫入した花崗岩類からなり、これらを碎屑物が被って段丘、扇状地、崖錐、谷底

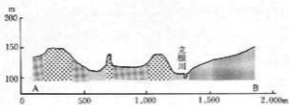
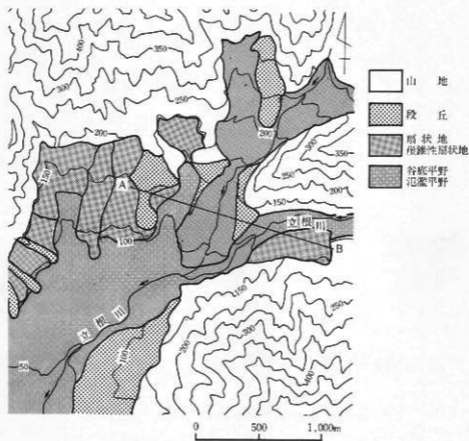


図2 遺跡付近の地形区分図

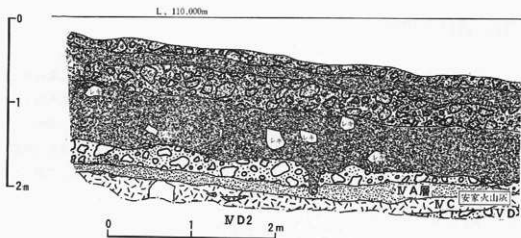


図3a 表層地質断面図 (H1-2区)

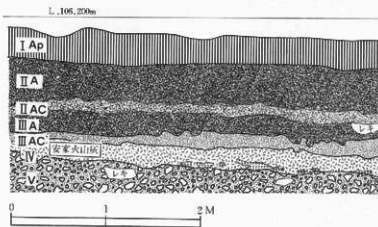


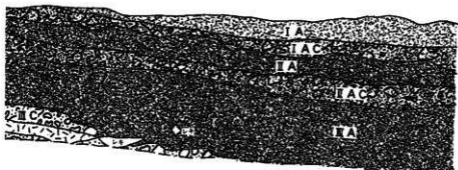
図3b 表層地質断面図 (D2区)

平野、氾濫平野などの地形が形成されている。

図2は、国土調査(岩手県, 1975)をもとにして空中写真判読により作成した遺跡付近の地形面区分図である。崖錐性扇状地、扇状地が遺跡付近の地形を特徴づけている。段丘の発達は悪く100~200m

の標高の範囲に認められる平坦面が唯一といえる。細野II遺跡の背後の段丘の露頭では、30cm前後の径の円礫からなる5~6m厚層の礫層が段丘構成層として認められる。立根川右岸では段丘と崖錐性扇状地が山麓線に直角に雁行に配列している。このことは、段丘が崖錐性扇状地、扇状地の経歴を有していることを示しているのかもしれない。

図3a・bは、細野II遺跡の表層地質断面図、図4はその模式柱状図である。河床堆積物を基底にして、その上位にテフラ層(IV層)、腐植質黒色土、崖錐性の礫層が累積する。テフラ層は安家火山灰・中級浮石と同定され(付編参照)、その降下堆積年代として約5,400年前(早川, 1983)



が得られている。したがって、遺跡の立地する谷底平野は縄文時代前期末葉ないし中期初頭に離水したものと推定される。しかし、当テフラの分布しない調査区もあり、テフラの降下堆積後も立根川の流路変動の影響を受ける不安定な状態にあったと推定される。

累積する被覆層は、崖錐性の礫層を指標層にして複数の堆積単位・土壤層位学単位に区分できる。上位・新期の単位から順にローマ数字を付し、各単位では土壤層位に細分した。被覆層

の最下位単位IVは、河床堆積物（VC層）を直接覆うテフラ層（IVC層）を基底層・母材とし、暗褐色（10YR3/3）の腐植層（IVA層）を伴っている。単位IIIは縄文時代早期～弥生時代の遺物を包含する黒色（10YR1.85/1）の腐植層（IIIA層）で特徴づけられるサイクルである。H1・2区では径20cm前後の亞角礫から構成される崖錐性堆積物を基底層（IIIC層）とするが、D2区ではそれを欠きIIIA層が直接IVA層を覆っている。単位IIは黒褐色土（10YR2/2）を基質とする径20～30cmの崖錐性亞角礫層あるいは黒褐色土（10YR2/2）を基底層（IIC層）とするもので、黒色（10YR2/1）の腐植層（IIA層）を伴う。また単位Iは黒褐色土（10

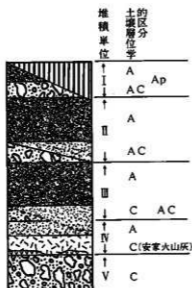


図4 表層地質模式柱状図

YR2/2)を基質とする径10~20cmの崖錐性亞角礫層を基底層(ⅠC層)とし、黒色(10YR2/1)の腐植層(ⅠA層)を伴う。なお、調査区の2/3を占める畑地部(D2区が含まれる)では、土地改良工事のために単位Ⅱの上部以上が改変され本来の層相を失っている。この造成土については、便宜的に単位Ⅰに相当するものとして扱った。

文 献

早川由紀夫(1983)十和田火山中振テフラ層の分布・粒度組成・年代、火山、第2集, 28, 263-273

岩手県(1975)北上山系開発地域、土地分基基準調査「盛」、国土調査, 39p

III. 調査の方法と整理

(調査区の設定)(図5)

調査域を縦断する任意の直線を設定してこれを基準線とし、この線上に80mを隔てて基準点1、2を設けた。2つの基準点の第10系の座標値(X, Y)および標高(H)は次のとおりである。

基準点1 X=-97123.928m Y=78558.399m H=107.750m

基準点2 X=-97159.352m Y=78486.680m H=106.530m

この値より基準線は真北に対して東へ約64°偏している。

基準線および基準点を通り基準線に直交する直線に平行して一辺20mの方眼を定めこれを大調査区とした。基準線に平行する区画に対して北側からアラビア数字を、また基準線に直交する区画に対して西側から大文字アルファベットを与え、大調査区を両者を組合せてA1区、B2区のように呼ぶ。各大調査区は4m四方の小調査区に区分し、北西端の調査区から基準線に平行に小文字アルファベットを順に与えた。したがって小調査区はA1a区、B2b区となる。

(遺構の名称)

検出された遺構は、位置する小調査区名と遺構種類名を組合せ、たとえば、A1a焼土遺構のように呼ぶ。

(図・図版)

図の縮尺はスケールで示している。図版の縮尺は、遺物については各図版に明示し、遺構については不定である。

(土層)

土層は前章で説明した土壌層位学的区分に従い「ⅠA層」「ⅡB層」などのように表記する。

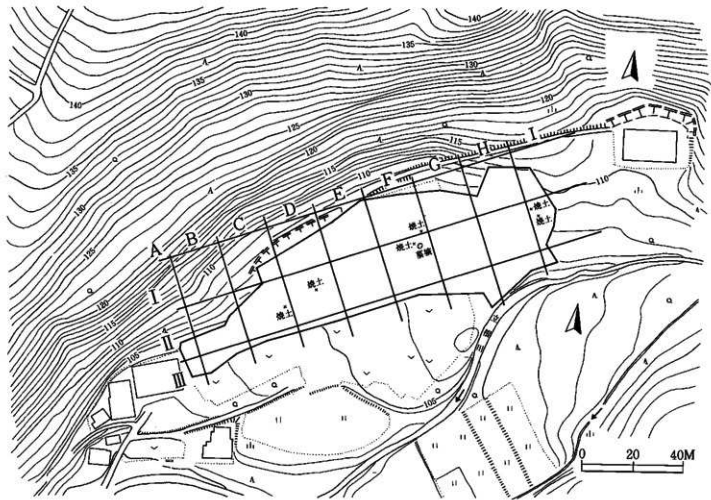


图5 遺構配置図

IV 遺構と遺物

1. 遺構

確認された遺構は、焼土遺構 6 基と墓塚 1 基である。

(1) 焼土遺構

C2o 焼土遺構

本遺構は C2o 区に位置する。検出層は II・III A 層である。15×20cm の範囲に不定形にひろがる 2 つの焼成土よりなる。一方は 5 cm、他方は 10cm ほどの厚さを有し、いずれも赤褐色 (5 Y R4/6) に焼成を受けている。石組などの構造を伴わず、遺物は出土していない。

D2m 焼土遺構

本遺構は D2m 区に位置する。検出層は II・III A 層である。大小 2 つの焼成土からなる。大は 16×20cm の洋ナシ状の広がりと中央部での厚さ 10cm、小は 6×10cm の楕円状の広がりと中央部での厚さ 5 cm の規模をもち、いずれも赤褐色 (5YR4/6) に焼成を受けている。石組などの構造を伴わず、遺物は出土していない。

F1y 焼土遺構

本遺構は F1y 区に位置する。検出層は III A 層中位である。10×35cm の範囲に不定形に広がる平面形と中央部での厚さ 5 cm ほどの規模を有し、赤褐色 (5YR4/6) に焼成を受けている。石組などの構造を伴わず、遺物は出土していない。

F2d 焼土遺構

本遺構は F2d 区に位置する。検出層は III A 層下部である。35×10cm の範囲に不定形に広がる平面形と中央部での厚さ 15cm ほどの規模を有し、赤褐色 (5YR4/6) に焼成を受けている。石組などの構造を伴わず、遺物は出土していない。

I2a 焼土遺構

本遺構は I2a 区に位置する。検出層は III A 層中位である。35×10cm の範囲にブーメラン状に広がる平面形と中央部での厚さ 5 cm ほどの規模を有し、赤褐色 (5YR4/6) に焼成を受けている。石組などの構造を伴わず、遺物は出土していない。

I2f 焼土遺構

本遺構は I2f 区に位置する。検出層は III A 層中位である。径 30cm のほぼ円状に広がる平面形と厚さ 5 cm の規模を有し、赤褐色 (5YR4/6) に焼成を受けている。石組などの構造を伴わず遺物は出土していない。

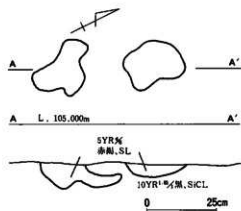


図6 C2o 焼土遺構

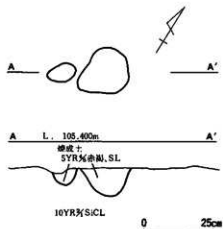


図7 D2m 焼土遺構

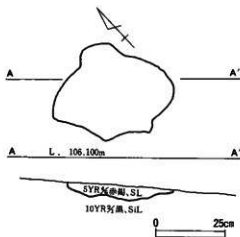


図8 F1y 焼土遺構

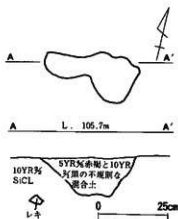


図9 F2d 焼土遺構

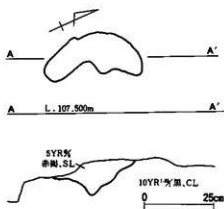


図10 I2a 焼土遺構

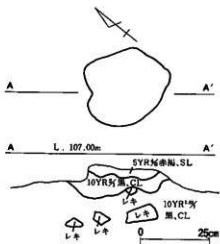


図11 I2f 焼土遺構

(2) 墓塚

F2区墓塚

本遺構はF2区に位置する。径80cmほどのほぼ円形の平面形を有する。重機による土層除去により、大半が破壊されて検出されたため底部の深さ20cmほどが精査できたにすぎないが、円筒形を呈する墓塚と推定される。

底面には性格不明の径20cm、深さ10cmの小穴を伴う。埋土は黒色(10YR2/1)の埴壤土(CL)で、一体の人骨が包含されていた。人骨は体を折り曲げたいわゆる屈葬の状態で、頭面をほぼ真北へ向けて葬られている。頭骨の特徴から老年の男性と推定される。副葬品として銭貨6枚が伴う。このうち少なくとも2枚は寛永通宝である。また人骨周囲の埋土からは、長さ1.5cm、径2mmの鉄釘が数本出土した。いくつかの釘には、それが打ちつけられた木棺の一部が付着している。本墓塚の時代は、副葬品として寛永通宝2枚を含む銭貨6枚が出土していることから近世以降と推定される。

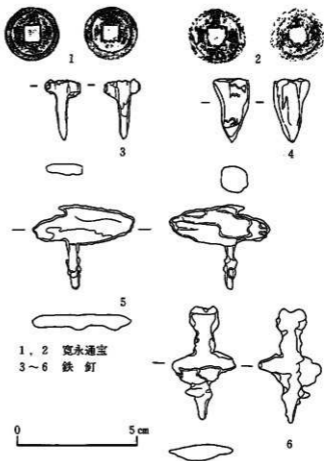


図12 F2i 墓塚出土遺物

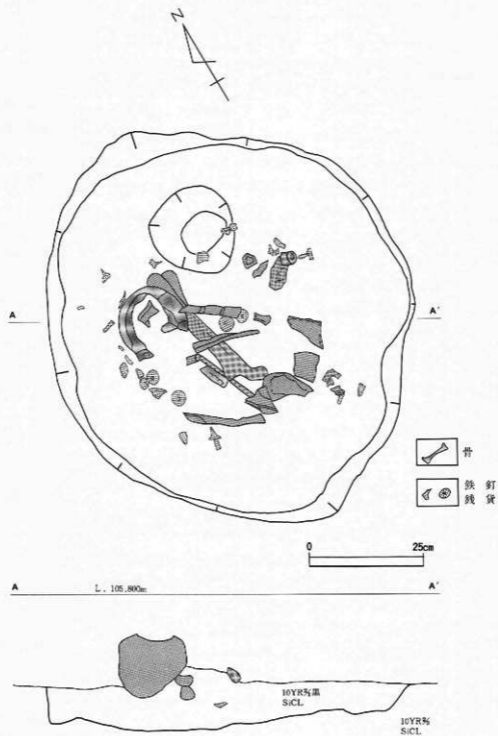


图13 F21基址

2. 遺物

大コンテナ1箱分の土器片がⅢA層から出土した。石器は出土していない。

「縄文時代早期」

図14-1(図版4-1)は、沈線に平行に棒状工具による径約1.5mmの刺突文が約5mmの間隔で、また、沈線の間あるいはその下縁に重ねて貝殻腹縁刺突文が施された土器片である。器厚は4-6mm、胎土は砂を含むが比較的緻密で、焼成は良好である。

図14-2(図版4-2)は、曲沈線がひかれており一部の沈線に重ねて連続する貝殻腹縁刺突文が施されている。また、沈線の合流部には棒状工具による刺突文を確認できる。胎土は砂を含むが緻密で、焼成はよい。器厚は7-9mmである。

図14-3(図版4-3)は、沈線にそって貝殻腹縁による刺突文が斜位に施されている。器厚は7mm前後、胎土に細礫を含むが比較的緻密で焼成は良い。

図14-4(図版4-4)は外反する頸部片で、沈線にそって貝殻腹縁刺突文が施されている。器厚は6-7mm、胎土は砂を含み比較的緻密で焼成は良好である。

「縄文時代前期」

図14-11(図版4-12・13)は、網目状捻系文を基調にして部分的にS字状連鎖沈文が水平方向に施された胴部および頸部片である。大木2b式に相当するであろう。器厚は10mm前後、胎土は砂、細礫に富み粗く、植物繊維を含んでいる。焼成は良好とはいえない。

図14-9(図版4-9)は、Lの捻系文が施された胴部片である。器厚10mm前後で、胎土は砂、細礫に富み植物繊維を含んでいる。焼成は良好とはいえない。

図14-8(図版4-8)は、Rの捻系文が施された胴部片である。器厚8mm、胎土は砂に富み粗く植物繊維を含む。焼成は良好である。

図14-6・7(図版4-6・7)は、Lの捻系文が木目状に施されている。器厚は8-9mm、胎土は砂に富み粗く、植物繊維をわずかに含んでいる。焼成は良好とはいえない。

図14-10(図版4-10・11)は、Rの捻系文が重複して施された胴部片である。器厚は7-9mm、胎土は砂に富み粗く植物繊維を含んでいる。焼成は良好である。

図14-12・13(図版4-14・15)は、Rの捻系文が施された胴部片である。器厚は10-12mmで厚い。胎土は砂に富み粗く植物繊維をかなり含んでいる。焼成は良好である。

図14-5(図版4-5)は、L、Rの組合せによる木目状捻系文の施された胴部片である。器厚は7mmほどで、内面はナデ調整されている。胎土は砂、細礫に富み粗く、焼成は良い。

図15-2・3(図版5-2・3)は、胴部、口縁部片である。太いLRの縄文が縦位に回転施文され、頸部には太いLRの圧痕が2条めぐる。胎土は砂に富みやや粗く多量の植物繊維を

含んでいる。焼成は悪い。器厚は10～5mmで、胴部から頸部へ徐々にうすくなる。

図15-9・10(図版5-11・12)は、水平な沈線と電光状沈線が施され、口縁部には鋸歯状突起をもつ。鋸歯状突起の上面は平たく調整され山形の沈線がひかれている。地文はLの捺系文である。大木5式に相当するものと思われる。器厚は8～9mm、胎土は砂を含み比較的粗く、植物繊維を含まない。焼成は良好といえる。

図15-8(図版5-1)は、大木5式に帰属される鋸歯状裝飾体をもつ口縁部片である。胎土は砂に富み粗い。焼成は比較的良い。

図15-1(図版5-9・10)は、細礫にすこぶる富み植物繊維を含む胎土を有する土器片である。不明瞭なRの捺系文が施されている。器厚は8mmほどで、焼成は良くない。

図15-4・7(図版5-4・8)は、LRの縄が異方向に回転押された土器片である。内面はナデ調整されている。器厚は7mm前後、胎土は砂に富み植物繊維を含んでいる。焼成は比較的良い。

図16-1・3(図版6-1・5)は、軽微に外反し波状を呈する口縁を有する。RLの縄が異方向に回転押された体部と無文の頸部は、RLの縄の側面圧痕により画されている。胎土は砂に富み植物繊維をわずかに含む。器厚は5～7mmで、焼成は比較的良い。

図16-4・8(図版6-6・10)は、LRの異方向回転圧痕が施された胴部片である。胎土は砂に富み粗く、植物繊維を含んでいる。焼成は悪い。器厚は6～8mmである。

図16-9(図版6-11)は、底面に木葉痕のある底部片である。胎土は砂に富み粗く、植物繊維を含む。内面、外面とも赤褐色に焼成されている。

図17-1・8(図版7-1・9)は、LRの縄の回転圧痕が器面全体に異方向に施された土器である。口縁は軽微に外反する。器厚は6～8mmで、内面はナデ調整されている。胎土は砂を含み植物繊維に富んでいる。焼成は比較的良好である。

「縄文時代中期」

図17-9・10(図版7-10・11)は、5～6本の沈線が波状にめぐる頸部を有する。沈線帯下部には、3個単位の刺突文が施されている。口唇部はゆるく波をうち、その凸部は肥厚して内面は吸盤状を呈する。体部には上帯にLR、下帯にRLを使った連結羽状文が横位に施されている。器厚は5～7mm、胎土は砂に富んで粗い。焼成は良く固くしまっている。大木7式に帰属可能と思われる。

図18-1・4(図版8-1・4)は、花卉状突起・大波状口縁を有する深鉢である。突起の上端部には丸棒工具の押圧による刻目が並列する。文様帯は沈線、隆線により区画され、LRの縄が横位に回転押されている。花卉状突起は並走する波状貼付隆線により2分され、隆線の下端にはボタン状貼付が施されている。大波状口縁の凹部では花卉状突起から延びてきた沈

線、隆線が閉塞し接している。器厚は8～9mmで、胎土は砂に富み粗く植物繊維は含まない。焼成は比較的良好。大木7式中相に帰属可能と思われる。

図18-5～10（図版8-5～13）は、右帯にLR、左帯にRLの結束羽状が縦位に施されている。器厚は6mm前後で、内面はナデ調整されている。胎土は砂に富み、焼成は比較的良好。

図19-5～8（図版9-5～13）は、軽微に外反する口縁部を有する土器である。頸部には2条のLRの側面圧痕が、体部にはLRの縦位の回転圧痕と綾格文が施されている。器厚は4～5mm、胎土は砂、細礫に富み粗く、焼成はあまり良くない。大木6ないし7式に帰属可能であろう。

図19-9～12（図版9-14～18）は、LRの縄の横位回転圧痕と綾格文が施されている。器厚は7mm前後で、内面はナデ調整されている。胎土は砂に富み焼成は比較的良好。

図19-1～4（図版9-1～4）は、右帯RL、左帯LRの結束羽状が縦位に施されている。口縁部は軽微に内傾してすぼみ、キャリバー状の器形を呈する。口縁部は無文でミガキ調整がなされている。器厚は6～7mm、胎土は砂、細礫に富み、焼成は比較的良好。

図20-1・2（図版10-1・2）は、波状を呈し外反する口縁部を有する深鉢である。U字文、渦巻文が沈線でえがかれ、U字文の内側はRLの縄文が縦位に施されている。胎土は砂を含み比較的緻密で、内面はナデ調整されている。焼成は良好。器厚は4～6mmである。大木9式に帰属可能であろう。

「縄文時代後期・晩期」

図20-7～10（図版10-7～11）は、LRの縄を回転押圧した後、曲沈線により区画された体部を有する土器である。頸部の地文はすり消され、ゆるく外反する口縁部には2本の沈線が平行してめぐる。器厚は5～7mm、胎土は砂に富み粗いが表面に粘土を塗るいわゆる化粧塗りがほどこされている。焼成は比較的良好。十腰内I式に帰属可能であろう。

図20-4（図版10-4）は、沈線と棒刺突が施されLRの地文を有し軽微に外反する口縁部片である。図7-3（図版10-3）は、並走する2本の沈線にはさまれた狭い隆帯と口唇部に沈線を有する口縁部片である。いずれも器厚は5mm前後で、胎土は砂を含みやや粗く表面には化粧塗りが施されている。

図20-5（図版10-5）は、閉塞する沈線の施された体部片である。器厚は3mm前後でうすく、胎土は砂をあまり含まずかなり緻密である。焼成は良好といえる。

図20-6（図版10-6）は、折返し風の裝飾帯を有する波状口縁部片である。裝飾帯の下端部はやや下垂するヒダとなっている。器厚は4～5mm、胎土は砂を含みやや含む程度で比較的良好である。焼成はかなり良好である。

図21-1～3（図版11-1～4）は、沈線で文様が描かれた土器片である。沈線間はLRの

回転圧痕やすり消縄文の手法がとられ、一部の沈線にそって刺突が施されている。器厚は4～5mm、胎土は砂をわずかに含む。焼成は良好である。

図20-11(図版10-12)は、斜に丸棒工具を連続して押しつけた小波状口縁を有する土器である。頸部には5条の沈線がめぐる。胎土は砂に富み、内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好とはいえず、器厚は4～7mmである。大洞C2式に帰属可能であろうか。

「弥生時代」

図21-4～6(図版11-5～7)は、軽微な波状を呈する口縁部を有する鉢である。沈線で変形工字文が描れ、その結節部には刺突が施されている。器厚は5～7mm、胎土は砂、細礫を含むが比較的緻密で、焼成は良好である。谷起島式に帰属可能と思われる。

図21-7(図版12-1)は、口縁部径25cm、高さ35cm以上を示す甕である。外反する口縁部は無文で軽微に波状を呈する。体部には比較的細いLRの縄が異方向に回転押圧され、一部は磨消処理が施されている。また体部には0段縄の綾絡文も認められる。胎土は砂を含み、焼成は比較的よい。器厚は4～5mmである。

図21-8・9(図版11-8・9)は、細いLの縄の押圧が施された土器片である。器厚は3mm前後、胎土は砂に富み、焼成は比較的よい。

図21-10(図版12-2)は、径9cmの底部を含む土器下部である。体部にはLRの縄が横位に回転押圧されている。最下部は磨消処理が施されて光沢を有する。器厚は5mm前後、胎土は砂をあまり含まず緻密である。焼成は良好で固くしまっている。

図22-2～8(図版11-15～20)は、口縁部が軽微な波状を呈し、体部上部にはホクロ状貼付を伴う変形工字文が描かれている。また、体部中～下部には、LRの回転圧痕が施されている。胎土は砂をほとんど含まず緻密で、焼成は極めて良好といえる。

図22-1(図版11-10・11)は、外反する無文の口縁部を有し、体部にはLRの縄文が異方向に施されている。胎土は砂を含み、内面はナデ調整されている。焼成はあまり良くない。器厚は7mm前後である。

図22-9(図版11-13・14)は、無文の外反する口縁部を有する土器である。体部には細いLRの縄文が異方向に施され、口縁部と体部は一本の沈線で明瞭に画される。器厚は、体部で7mm、口縁部で4mm前後である。胎土は砂に富み粗く、また雲母をかなり含んでいる。焼成は良好、固くしまっている。

「その他」

図23-5(図版12-5)は、Lの異条の縄を縦位に回転押圧し施文されている。器厚は8mm前後、胎土は砂に富むが緻密で、焼成は良い。

図23-3(図版12-3)は、底面に網代痕の認められる径16cm前後の底部片である。胎土は

砂、細礫に富み粗く、焼成は極めて悪い。

図23-1・2（図版12-7・8）は、やや外反気味の無文の口縁部とLRの縄を異方向に回転押圧施文した体部を有する土器である。器厚は5mm前後、胎土は砂に富み粗いが焼成は良い。

図23-7（図版12-6）は、LRの縄が縦位に回転押圧され軽く磨消処理された土器体部である。胎土は砂をあまり含まず緻密で、焼成はよく固くしまっている。器厚は6mm前後ある。

図23-4（図版12-9）は、木葉痕のある径7cmほどの底部である。胎土は砂を含むが比較的緻密である。焼成は良好で固くしまっている。

図23-6（図版12-4）は、Lの縄が縦位に回転押圧された土器片である。胎土は砂をあまり含まず、焼成は良い。器厚は5～6mmである。

（遺物の2次的移動について）

遺物の包含層であるIII A層が中礫浮石層の降下堆積以降すなわち、縄文時代前期末葉ないし中期初葉以降に生成したものであることは、表層地質層序から明らかである。したがってIII A層から出土した縄文時代早期の土器のすべてと前期の土器の大部分は2次的に移動している可能性が大きいものと判断せざるをえない。調査区北西に隣接する洪積段丘面あるいはそれへの移行斜面が縄文時代の早期、前期の主要な活動領域として利用され、そこから何らかの営力で当該時代の遺物が調査区へもたらされたのかもしれない。

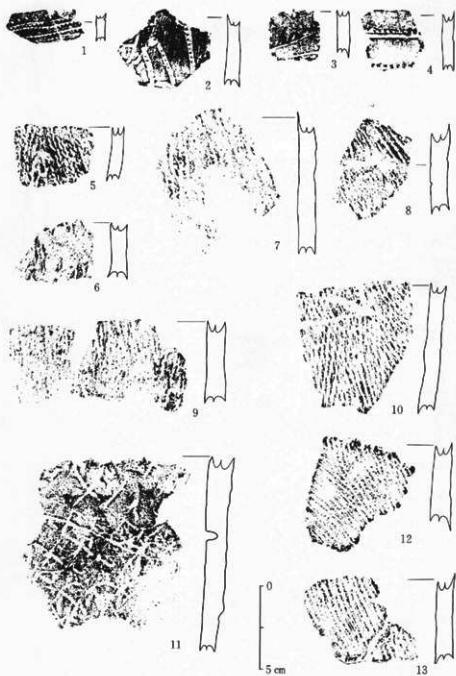


图14 出土遗物(1)



图15 出土遗物(2)

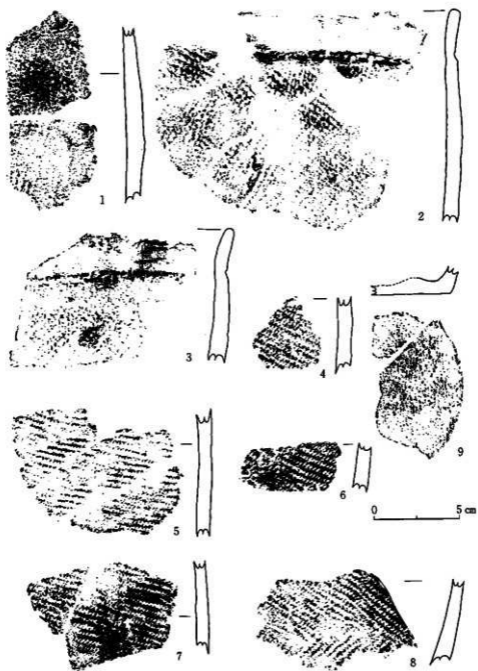


图16 出土遺物(3)

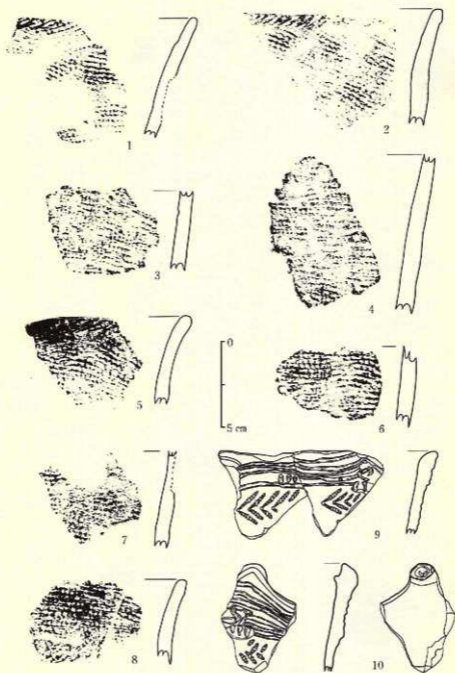


图17 出土遺物(4)

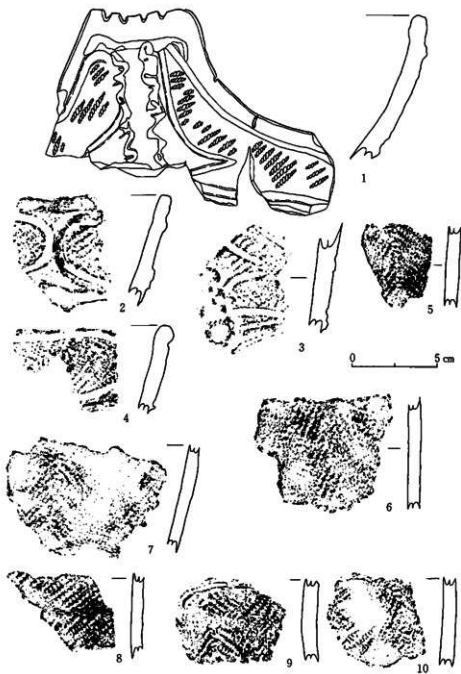


图18 出土遗物(5)

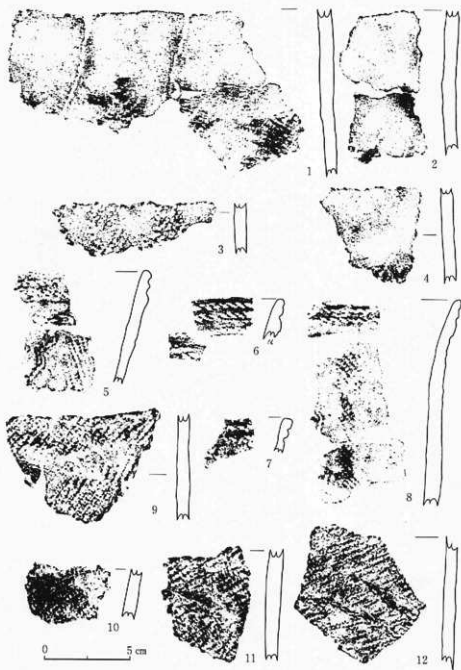


图19 出土遺物(6)

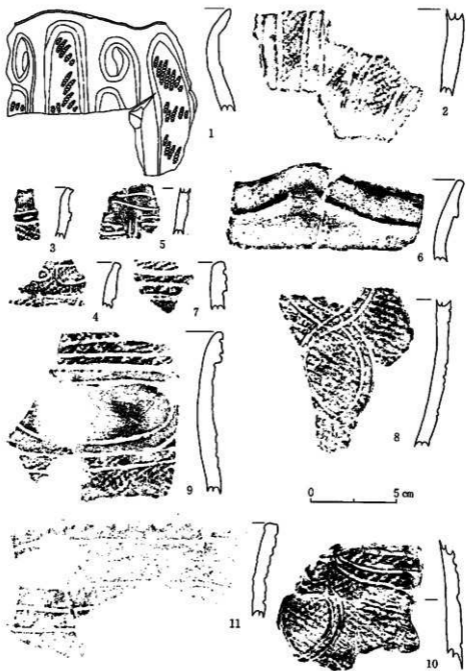


图20 出土遗物(7)

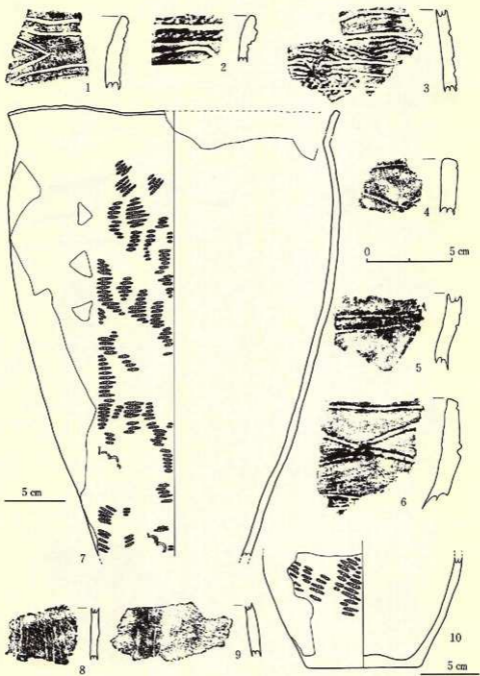


图21 出土遺物(8)

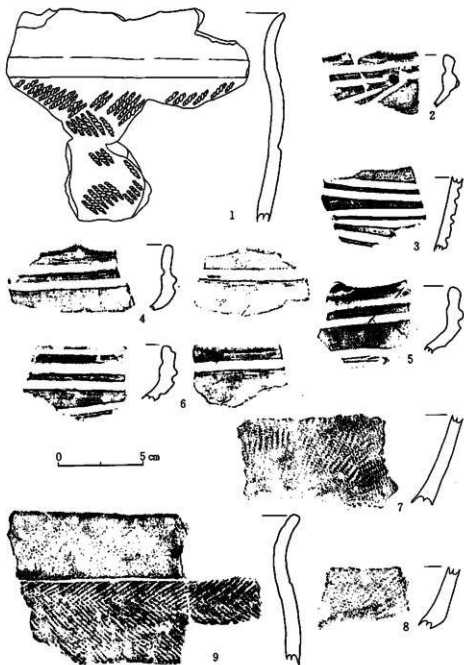


图22 出土遺物(9)

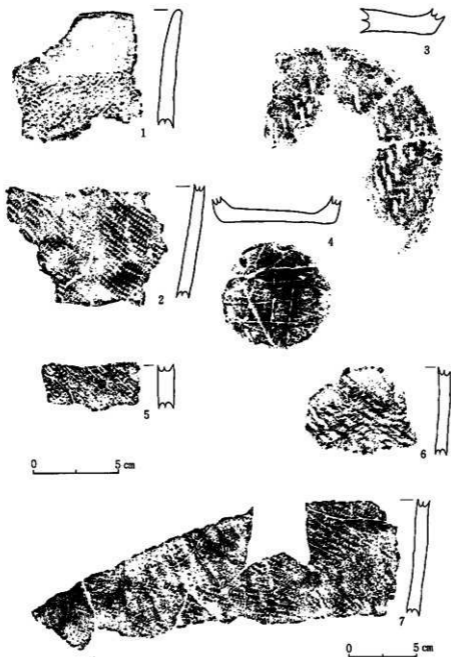


图23 出土遺物00

V. まとめ

細野II遺跡の発掘調査の結果は次のようにとめられる。

- (1)細野II遺跡は立根川右岸の段丘化した谷底平野に立地し、その構成層は中振浮石層（安家火山灰）を基底層とする少なくとも4つの堆積単位からなる黒色腐植土と崖錐性堆積物の互層に被覆される。中振浮石層が約5,400年前の十和田火山の噴火に伴うテフラ層であることから、遺跡の立地する谷底平野は縄文時代前期末葉ないし中期初葉に離水したものと推定した。
- (2)検出された遺構は焼土遺構6基、基壇1基である。焼土遺構はいずれも時代を確定できる構造や遺物を伴わない。基壇は直径80cmほどの円筒形を呈するもので老年男性と推定される人骨が埋葬されていた。寛永通宝を含むいわゆる六遺銭を副葬品として伴うことから、近世以降の基壇と判断した。
- (3)遺物は縄文時代早・前・中・後・晩期と弥生時代の土器から構成され、ほとんどがⅢA層から出土したものである。ⅢA層が中振浮石層の堆積以降すなわち縄文時代前期末葉ないし中期初葉以降に生成したものであることから、出土したすべての早期の土器と大部分の前期の土器は、異地性の遺物・2次的移動した遺物である可能性が高いと判断した。
- (4)以上のことから、細野II遺跡は縄文時代の早期から弥生時代までは何らかの活動の場として、また、近世においては埋葬地として利用されたことが判明した。

付編

細野II遺跡 火山灰分析報告

1. 分析の目的

細野II遺跡は、立根川右岸の段丘面上に位置している。段丘面の表層部は土壤に覆われているが、その土壤には複数の層準にわたって斜面堆積物に由来する淘汰の悪い角礫層が認められている。また、土壤中には一枚のテフラ層が確認された。本分析ではこのテフラ層についてテフラ分析および屈折率測定を行い、その特徴からすでに噴出年代が明らかにされている示標テフラとの対比を行い、遺跡断面中に時間軸の設定を行う。なお平成2年5月31日に野外調査を行い、現地において土層断面の観察を行った。

2. 分析試料と方法

分析の対象は遺跡で採取された試料1および試料2の2点である(図1)。分析は次の手順で行った。

- (1)試料10gを秤量
- (2)超音波洗浄を行い、泥分を除去。
- (3)80℃で恒温乾燥。
- (4)実体顕微鏡下で観察。

また試料のうち、とくに純度のよい試料2に含まれる火山ガラスについて、屈折率の測定を行った。測定方法は、新井(1972)に従っている。

3. 分析結果

テフラ分析の結果を、表1に示す。試料1と試料2の間では、顕著な違いを認めることができなかった。いずれの試料にも火山ガラスが非常に多く含まれている。鉱物としては、斜方輝石のほか単斜輝石が少量認められる。火山ガラスの最大径は0.05mm程度で、その形態は量の多い順に繊維束状やスポンジ状に発泡した軽

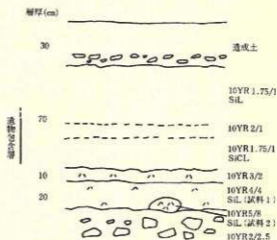


図1 細野II遺跡テフラ分析試料採取断面図

表1 細野II遺跡のテフラ分析結果

試料番号	鉱物組成*1	火山ガラスの最大径	火山ガラスの形態*2
1	gl, opx, cpx	0.46mm	pm)bw)md
2	gl, opx, cpx	0.48mm	pm)bw)md

*1, gl:火山ガラス, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, *2, qm:軽石型, bw:バブル型, md:中間型。

石型、平板状のバブル型、そして分厚い中間型である。ほとんどの火山ガラスは無色透明であるが、ごく少量褐色半透明のものも認められる。層相から、おそらく試料1は試料2の風成2次堆積物と考えられる。

テフラの同定の精度を向上させるため、より純度の良い試料2に含まれる火山ガラスについて屈折率(n)の測定を行った。屈折率(n)は、1.507-1.513であった(表2)。なお

野外調査で観察を行った土層の注状図を、図2に示しておく。

表2 細野II遺跡の屈折率測定結果

試料番号	火山ガラスの屈折率(n)
2	1.507-1.513

4. 考察—示標テフラとの対比

層相や火山ガラスの形態、さらに火山ガラスの屈折率(n)などから、細野II遺跡で認められたテフラは、北上山地北部一帯に分布する「安家火山灰(菊池ほか、1984)」に対比されるものと思われる。安家火山灰の堆積年代は、安家茂井遺跡における遺物との層位関係から縄文時代前期初頭と推定されている。さらに安家火山灰の上位および下位の埋没土壌から、それぞれ $4,890 \pm 140$ y. B. P.、 $5,630 \pm 130$ y. B. P.の ^{14}C 年代が得られている(樽垣ほか、1984)。なお安家火山灰については、層相から約5,000-5,500年前に十和田火山から噴出した十和田—中報テフラ(To—Cu、早川、1983、町田ほか、1984)に対比される可能性が大きいと考えられている(田村ほか、1986)。また早田ほか(1987)は、安家火山灰の岩石記載的特徴を明らかにして中報テフラに同定される可能性が大きいことを述べるとともに、東北地方南部まで広く分布することを明らかにしている。

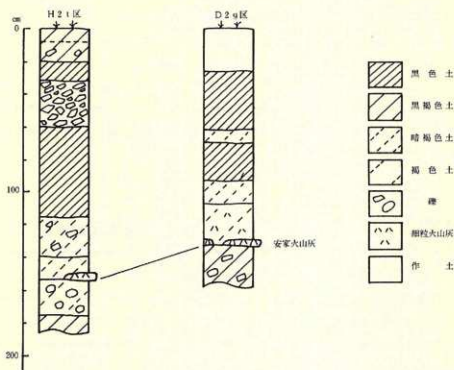


図2 細野Ⅱ遺跡の土層柱状図

細野Ⅱ遺跡においては、安家火山灰上位から縄文時代早期および前期の遺物が検出されている。テフラの同定結果から、これらのうちとくに早期の遺物は他所から移動して来た可能性が考えられる。

5. まとめ

細野Ⅱ遺跡で検出されたテフラ層は、縄文時代前期初頭に堆積したと考えられている安家火山灰に対比される。安家火山灰は、5,000—5,500年前に十和田火山から噴出した十和田—中浜テフラに対比される可能性が大きい。その年代観からみて、テフラ層より上位から出土した縄文時代早期の遺物は他所から移動してきた二次堆積遺物の可能性がある。遺構・遺物などの検出状況など、考古学的所見との総合解析が必要となろう。

文献

荒井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究—, 11, p.254—269.

早川由紀夫 (1983) 火山豆石として降下堆積した十和田八戸火山灰, 火山, 第2集, 28, p25—40.

菊地強一・楢垣大助・吉永秀一郎 (1981) 北上山地東部に分布する縄文時代前期火山灰について, 東北地理, 33, p.57—58.

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—, 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865—928.

早田 勉・八木浩司・西城 潔・新井房夫・高田将志 (1988) 縄文時代の示標テフラ—吾妻火山灰 (講演要旨), 東北地理, 40, p.231.

田村俊和・宮城豊彦・楢垣大輔・西城 潔 (1986) 早地峰自然環境保全地域及び周辺地域の地形と表層物質, 早地峰自然環境保全地域調査報告書, 環境庁自然保護局, p.21—55.

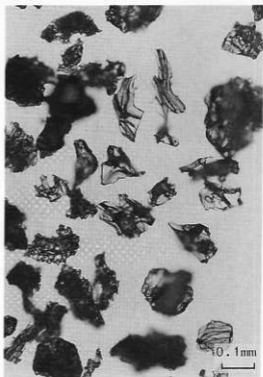
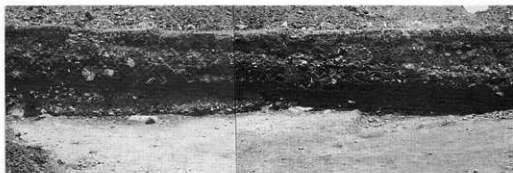
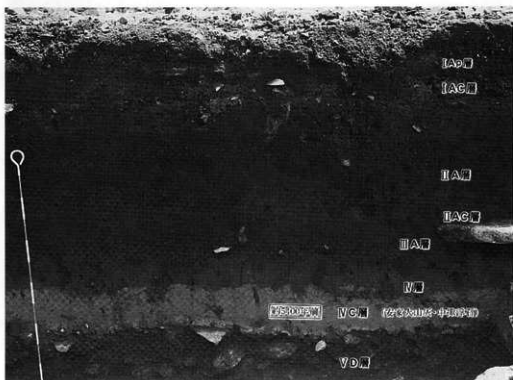


図3 試料2に含有される火山ガラス

写 真 图 版



H1-2区 表層地質断面



D2区表層地質断面

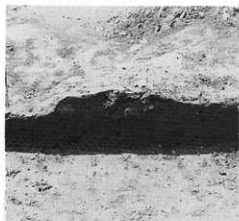
図版1 表層地質



D2m 区烧土遗構



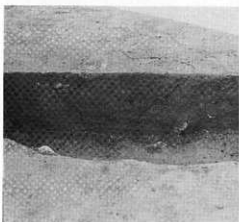
I2f 区烧土遗構



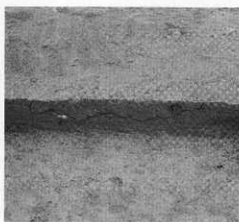
I2a 区烧土遗構



C2o 区烧土遗構



F2d 区烧土遗構



F1y 区烧土遗構

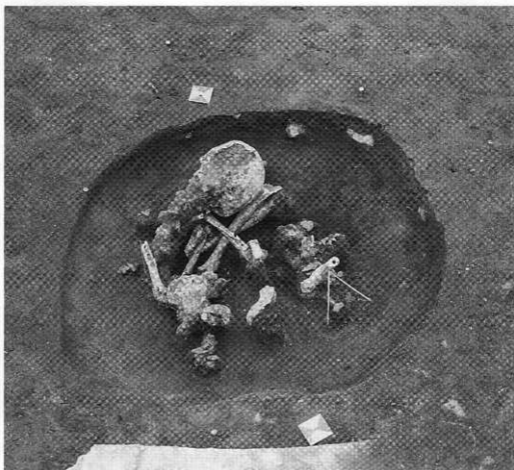
图版2 烧土遺構



掘り方

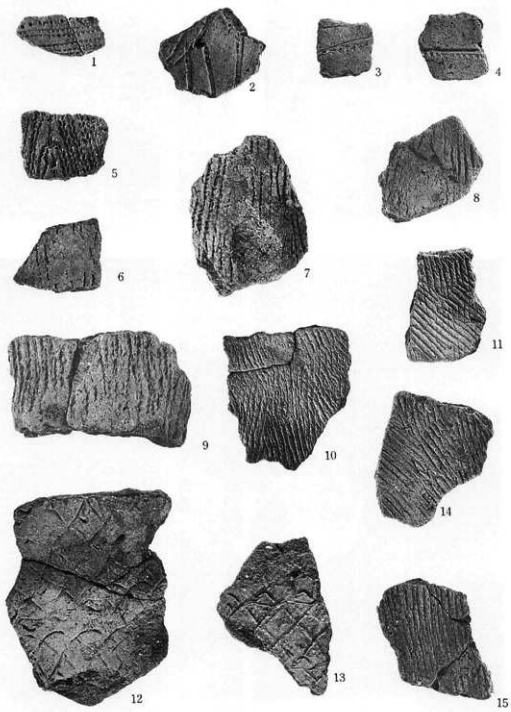


検出状況



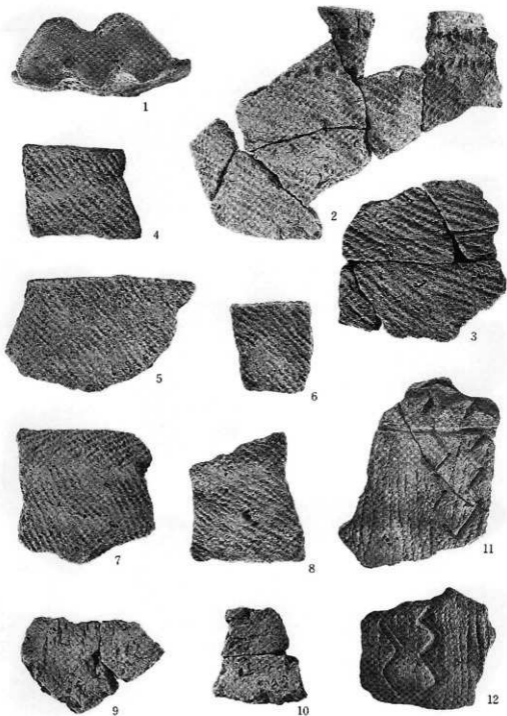
出土人骨

図版3 墓塚



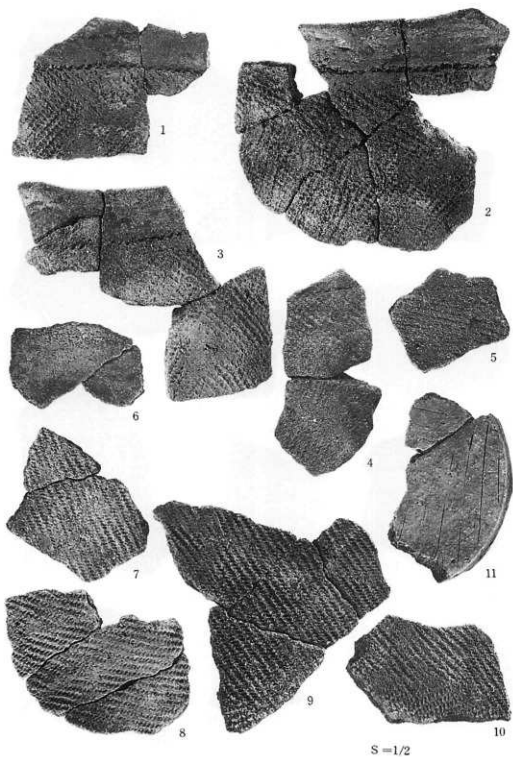
S-1/2

图版 4 出土遺物(1)



S-1/2

図版5 出土遺物(2)



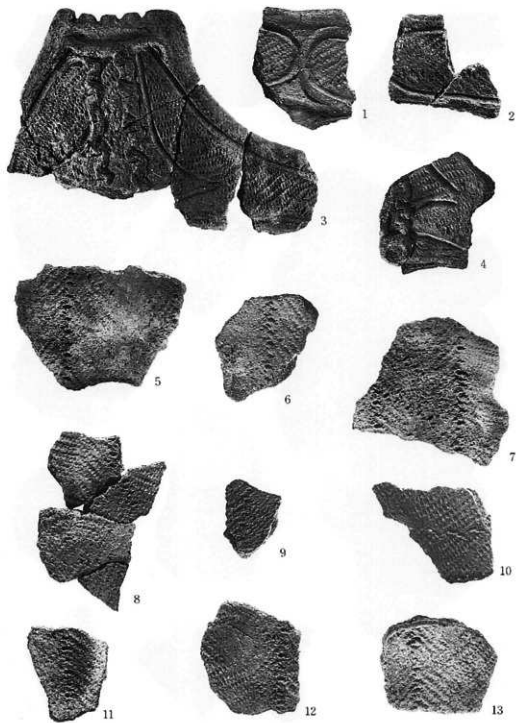
S=1/2

图版6 出土遗物(3)



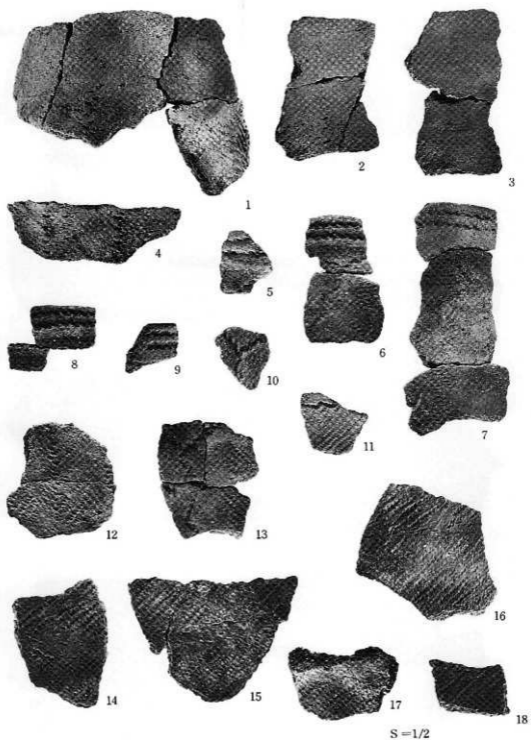
S=1/2

図版7 出土遺物(4)

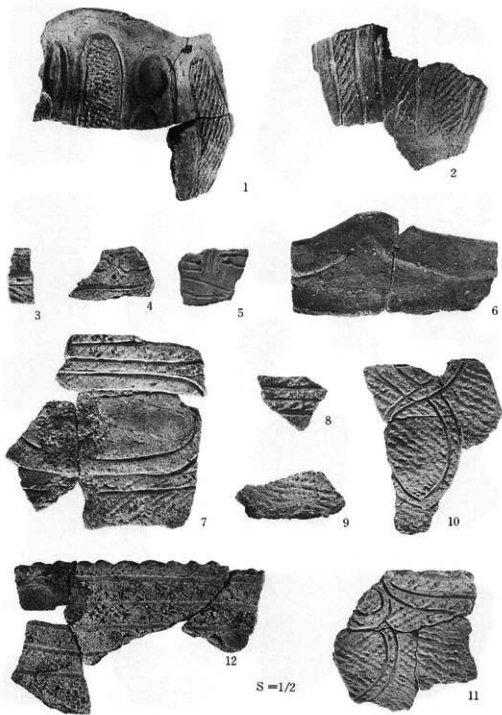


図版 8 出土遺物(5)

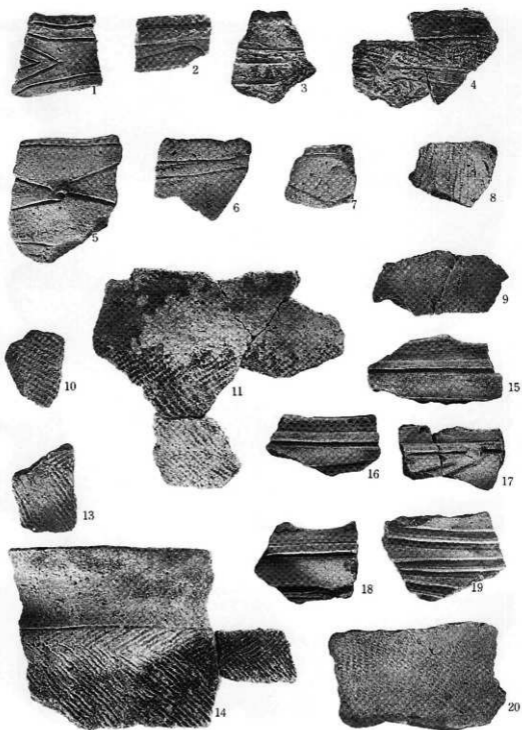
S=1/2



图版 9 出土遺物(6)

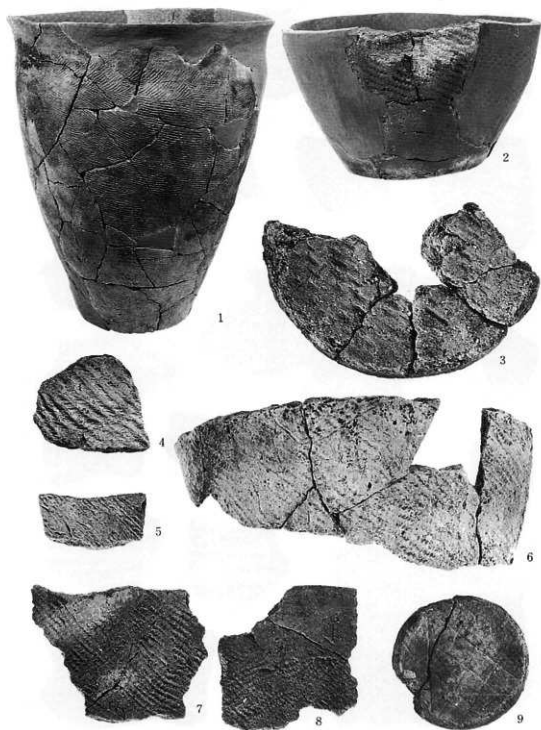


图版10 出土遺物(7)



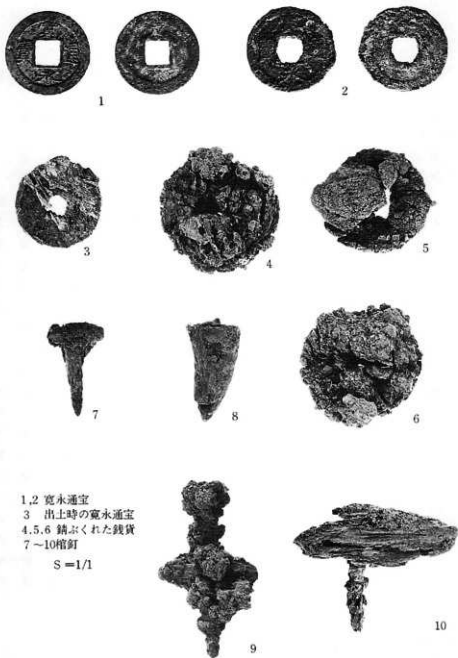
S=1/2

图版11 出土遗物(8)



1はS=1/4、他はS=1/2

図版12 出土遺物(9)



1,2 寛永通宝
 3 出上時の寛永通宝
 4,5,6 錆ぶくれた銭貨
 7~10 棺釘

S=1/1

図版13 墓竈出土遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 小笠原 喜 一
 副所長 高橋 敬 明

[管理課]

管理課長(兼) 高橋 敬 明
 管理課長補佐 森 岡 陽 一
 主 事 佐 藤 理

[調査課]

調査課長 村上 康 昭
 課長補佐 佐々木 嘉直
 // 鈴木 恵 治
 主任 文調 財 小田野 智 憲
 専門 文調 財 三浦 謙 一
 // 工藤 利 幸
 // 高橋 興右衛門
 // 平井 進 紀
 // 中川 重 敏
 // 藤村 敏 義
 // 高橋 義 介
 文 文調 財 斎藤 實 隆
 専門 文調 財 千葉 孝 雄
 // 斎藤 博 司
 // 東海林 陸 幹
 // 佐々木 弘 均
 // 川村 貞 行
 // 鈴木 東 格
 // 伊達 藤 修
 // 斎藤 邦 雄
 // 神 敏 明

[資料課]

資料課長 村松 義 夫
 主任 文調 財 田 鎖 寿

嘱 託 吉田 一 男
 一 文 春 男
 // 技能 士 員
 運 兼 転 技 佐 藤 理
 文 化 財 文 門 調 査 員
 // 木原 信 一
 // 村上 一 修
 // 酒井 宗 建
 // 松本 克 子
 // 笹平 政 博
 // 花坂 務 彦
 // 佐々木 昭 彦
 // 金子 田 宏
 // 演 田 精 造
 // 録 田 部 勝 則
 // 阿 安 邦 彦
 // 星 雅 之
 // 引 屋 敷 学 己
 // 鈴木 木 知 隆
 // 藤 村 業 悟
 // 千 谷 博 由
 // 熊 倉 信 一
 // 新 山 口 博 英
 // 川 村 聡 聡
 // 八重座 のり子

岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第170集

細野II遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 平成4年2月25日

発行 平成4年2月29日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185
電話 (0196) 98-9001-2

印刷 ㈱熊谷印刷
〒020 岩手県盛岡市上田一丁目6-49
電話 (0196) 53-4151

© 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992